



シルバー インフォメーション ルーム

神戸市東灘区本山北町6丁目2-13

電話 (代表) 078(431)6008

FAX 078(431)6008

1994年 9月 発行

第 2 号

交流会をはじめて

坏 (あくつ) 光子

開設以来一年余りが過ぎ、相談回数も延べ400件以上となりました。最近の傾向として、継続的に、2度、3度とお電話をかけてこられる方が増えてきたことです。ご老人を家で世話される場合も、病院、ホーム等の施設に入られる場合も、症状が進んだり、介護の環境が変わったりと、状況が変化して行くことが多く、いろいろと悩んで選んだ結果であっても、「これで良かったのか」、「もっと良い方法があったのではないか」と不安が生まれてくるものです。私共がお話相手をするだけで安心される方もありますが、やはり、同じような悩みを持たれたり、介護の経験をされた方々の話を、実際に会って聴かれると、随分気分も楽になれるのではないかと考えました。

「あそこへ行けば、気分も変わってほっとする。」

「あそこへ行けば、何か介護のヒントが得られる。」

と、皆様が気軽にお茶でも飲みながら、お喋りができるサロンのような所として

《交流会》を企画しました。開催は月1回（毎月第3土曜日、午後1時～4時）ですが、介護をしておられる方々の息抜きの場になればと願っています。話し合うだけでも互いに情報交換になりますが、その他に具体的な悩み、例えば、「おむつはどんなものが良いか」、「どんなものを食べさせればよいか」、「福祉事務所ってどんなところ？」等、一つのテーマを選んで、専門に話を聴いたり、介護に関するビデオを見たりして、30分程の小さな勉強会も開いていこうと考えています。

7月に開かれた第一回交流会には15名の方々がご参加下さり、和やかにお話しが弾みました。これからも多くの方々にご参加いただければと願っています。

交流会のご案内

毎月第3土曜日 午後1時～4時

(参加 無料)

9月17日「老人の食事」

10月15日「母を特養にいれて」



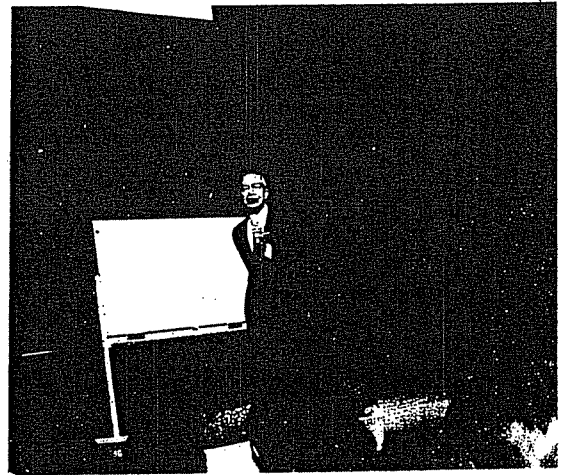
シルバー インフォメーション ルーム開設一周年記念講演会

早川 一光先生 “いきいき生きる”

1994年4月16日(土) 於 神戸東灘区民センター“うはらホール”

北に春霞にかすむ六甲山をのぞみ、南におだやかな大阪湾が見渡せる春爛漫の神戸市東灘区民センター“うはらホール”で、約600人の聴衆を集めて、早川一光先生の講演会は開催されました。現在のように老人問題が社会問題になるずっと以前から痴呆老人の問題に取り組まれ、西陣の人々のために往診をし、診療所をひらかれて地域の人々、特にご老人方の支えになって来られた早川先生のお話を聞こうと遠方からお弁当をもって来られた方もありました。

マイクを手にステージの上を右に左に歩き回りながらのお話しに、聴衆一同2時間おなかを抱えて笑いどおしでした。しかし、強い信念と実践に裏付けられた先生のお話しは、聞くものの心を揺さぶり、感動を呼びました。以下は先生のご講演の簡単な要旨です。



“どこにも相手にされないボケ老人、このような人を家で見ていくにはどうすればよいのか、町ぐるみで助け合う事ができれば、お金がなくてもかかれるような診療所をとの思いで、昭和25年京都西陣に開設しました。43年間ずっと、病気というよ

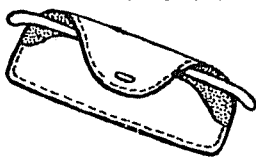
本 棚

☆

「夫婦が試されるとき」 (講談社)

(上村達雄、神戸学院教授)

楽天的で快活だった妻が突然痴呆症に、夫婦に訪れた重い現実を老人ホームから発信する大学教授の書



☆

「ボケても心は生きている」 (創元社)

(佐々木 健、老人専門病院院長)

知的な部分は低下するが、心や感情は驚くほど高く保たれている痴呆老人と上手につき合う法

☆

「シングルライフ 孤独を生きる」 (講談社)

(大原健士郎、浜松医大教授)

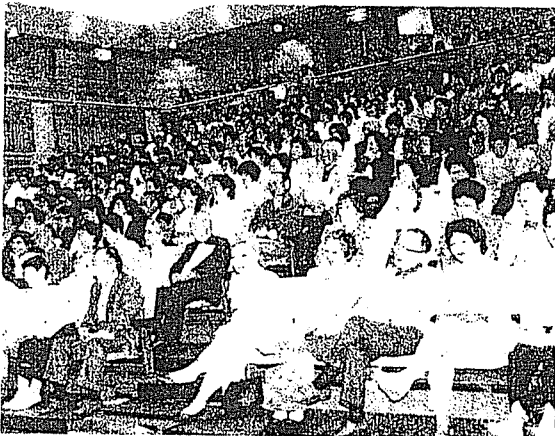
配偶者の死、子供の独立、誰もが避けて通れない人生後半の大きな変化を、たとえ独りでも、より有意義に生きるための書

りはむしろ生活を見続けて来て、老人の枕元で何もすることは出来ないが、側にいるということが医療だと思いました。たった一人であることがどんなにさびしい事か、どんなに新しい設備、ケアのいきとどいた施設に入れようとも患者さんは満足していないのです。住み慣れた家で家族の元に居るのが一番心が安らぐのではないのでしょうか。出来るだけ手を握りながら見てやってほしいとおもいます。お年寄りや若い人のように治らない。むしろどこか良いと

ころを見つけてあげると生きる励みが出て来るのです。かたくなった心を柔らかくほぐし、いいお年寄りだったと言わせるようにしていくのが一番です。又、家で一生懸命看て居る家庭は空気が暖かく、道行く人の足音が聞こえる部屋で寝ていても生活の息吹を感じられる事こそが重要なのです。

多くのおじいさんは、おばあさんに看護をしてもらえるし、これ以上の看護は病院では望めません。しかし残ったおばあさんの看護をするのは息子夫婦であり、それを地域で支えねば在宅医療は困難です。地域の人々がこの方向に目を向けて行くことがこれから必要だと思っております。

どんな時も「おかげさまで」と言える人となるよう。向こうに隠れて見えないものをわかり、心の目で見て聞くように心掛けましょう。人の恩を知り、感謝する心を養う事で良い老後を迎えられるでしょう。医者として悟った事は、治しの医療、送りの医療、彼岸への送りが医療の姿であるという事です。”



お便りから

現在まで述べ380件を超すご相談がありました。介護の道が開けた方、お年寄りの状態が変わって再度相談に来られた方、そして見送られた方、いろいろな方からお便りを頂きました。

「お暑い日々が続いておりますが、皆様にはお元気で活躍の事と存じます。

実は、7月5日に姑が亡くなりました。今年に入ってバタバタと、二人とも亡くなってしまいました。急に淋しくなって力が抜けてしまったような気が致します。

いろいろと情報といただきまして誠にありがとうございました。今後とも皆様方の益々のご活躍をお祈り申し上げます。」

(宝塚市 主婦)

ご冥福をお祈り申し上げます。どうぞお疲れのでもせんように。

1994年5月28日

岡山市笠岡市

きのこエスポール病院

JR山陽本線笠岡駅より車で10分、環境のよい高原にある痴呆性老人専門民間病院で明るい雰囲気は病院と言うよりも、むしろ特養という感じをかもし出していた。全館案内をうけて見学をさせてもらったが、どの部屋も広々としており、各部屋でも食事ができるようにテーブルも備えてあった。しかし、見学した昼間は本当に寝たきりの方々を除き全員ベッドを離れ、それぞれの症状にあわせて広い部屋や、ロビーなどに集まって好き好きに時間を過ごすようになっていた。徘徊老人も安心して歩き回れるし、大声を上げて誰もとがめる事もなく入院中の老人方は皆一様に明るい顔で平和な表情をして居られた。またここには夫婦のどちらかが痴呆症でそのかたのケアを少しは自分でもしたいと言われる方のための個室や、特別室も完備していた。

院長の佐々木健先生の考案されたボール塗りのリハビリをする部屋もあり、痴呆老人のためには、大変行き届いた、適切な治療と介護がなされているように思えた。

入院患者の約6割の方が快方に向かい家庭に復帰している。入院費は老人医療費:1日700円、介護諸経費(洗濯など)約20,000円、おしめ使用の場合20,000円の費用が毎月の経費のあらましとなっている。個室料5,000円、特別室15,000円。デイケアサービスもあり25名が受けている。1カ月で1,000円、おやつ、娯楽費1日300円である。

痴呆になっても、このような病院で看護を受けることができれば、本人にも家族にとっても安心であろうという感想をもった。

1994年7月5日

兵庫県川西市

ケアハウス ゆうハウス

7月5日、川西市清和台に新設されたケアハウス「ゆうハウス」を見学した。

清和台中央駅でバスを降り、静かな住宅街に「ゆうハウス」が建っていた。清潔な環境、ゆったりとした室内、食堂の窓からは緑の山々が遠くまで見渡せる。

二人のケアワーカーが常駐し、緊急事態にも対応できる態勢がとられている。一階には地域交流センターがあり、浴室や、娯楽室が設けられ、地域の人々によく利用されている。「ゆうハウス」からの利用者も多く、地域との交流が自然に図られているようだ。

入居時にはコーディネーターの面接があり、共同生活に適し、自立した生活ができるかをかなり厳しく判定される。本人が本当に入りたいと思っているか、そこに自分の将来を託す決意があるかが何より大切だということだった。

確かに今までの生活から、八畳一間にトイレと小さな台所という空間での生活に切り替えるのだから、持ち物の整理とか親しい人々との別れなど余程の決意が要ることであろう。しかし、入居後に食事、入浴など基本的な日常生活の援助を受けながら、住み続けられるのであるから、その安心感は大きいことであろうと思われる。今後、このような施設が、私達の生活圏に数多くでき、より家庭での生活に近い状態で、安心して老後を過ごすことができるようになって欲しいものだ。



痴呆の義母と共に

K. Y.

[痴呆の始まり]

いつもと違う母の様子に気づいたのは、1992年夏、母の80才の祝いの席でした。落ち着きがなく、孫たちの名前を間違える、自分に関係のない話になると不機嫌になり、人の言葉尻を捉えてはつかかかっていく有り様で、次々と供される料理は最後の和菓子まで全て食し、今までにない食欲を見せましたが、その時は気難しくなってきた程度にしか思いませんでした。「私、この頃よく物忘れするし、気が急いで仕方がないし、何か妙な気分になるの」と言いながら年も改まりました。

日、曜日を忘れる、指示どおりに用事にかからないと怒り出す、昔の事柄は鮮明に覚えているが、新しい知識は記憶できない等と共に、翌年春頃から痩せ始め、CTスキャン、その他の検査を行いました。身体的異常はなく、脳の萎縮も年齢相応と診断されたので、《痴呆》の初期とは思えず、否、家族の誰もが思いたくなかったのかも知れません。

お盆には、お経を上げながら、何節も前を行ったり、戻ったりで、ついていくのに困りましたが、終わったとたん、大晦日と間違え、「お正月の用意が何もできていない、何をしているの」と、突然大声でどなりだしたのです。このころから変化が加速し、対応に戸惑うことばかりでした。日、週、月、季節の混乱、身近な孫までが他人に見え、夕刻になると、「早く家に帰りな

さい」と諭し、この家の者だと言うと、「私を騙すのか」と怒ります。嫁はお手伝いさんとなりましたが、まだ子供達はなんとか覚えています。今、自分が何をし、何を話していたのか忘れ、唐突に、頭に浮かんだ事、昔の話を一方的に話し始めるので、私たちには前後の事柄が分からず、会話は成り立ちません。じっとすることができず落ち着きがなく、無意味に部屋や廊下を疲れを知らないかのように歩き回ったり、いっともなしにおやつをとりました。

冬を迎える頃には、話をする側から忘れていき、自分に何の相談もないと怒り、嫉妬深くなり、猜疑心も強く、以前と違った性格が表れてきました。

1994年正月は、法事と間違えて一騒動起こし、更に子供達を認識しながら、姉妹や亡くなった両親と一緒に暮らしているかのように振る舞う《退行現象》や《夜間せん妄》も出て、さすがに私達も母の状態を正しく認識しなければと思い、シルバーインフォメーションルームに相談の電話をかけ、県立高齢者脳機能研究センターを教えて頂きました。主治医の紹介状を持って検査入院をし、1カ月後、アルツハイマー型老人痴呆症と診断されました。二月のことでした。 (次号につづく)

兵庫県高齢者脳機能研究センター

姫路市西庄甲520 (☎0792-95-5511)

外来: 月~木 9:00~11:00

- ・ 本人を連れてくること
- ・ 主治医(家庭医)の紹介状持参
- ・ 初診予約不要

(医師の判断で検査入院もありうる)

多くの方々から、ご支援のお申し出を頂きました。厚く御礼申し上げます。相談活動に有効に使わせて頂きます。

〈賛助会員〉 平成6年4月～
(順不同、敬称略)

基原 久美子	片山 恵
遠藤 美智子	大江 哲也
村上 真理子	都築 いく子
陳 幸子	松井 久典
前川 和子	楨本 彰
山田 真知子	大井 幸子
宮前 享一郎	大西 邦子
片山 京子	
合田 祥子	福祉学級
梶原 修	ひまわりグループ
神田 英作	末田 わか子
川那辺 裕子	協和ガスサービス(株)
中川 恵子	大江 克芳

〈ご寄付下さった方々〉
(順不同、敬称略)

天狗 昭夫	田中 ひろえ
大村 静子	尾美 澄子
今竹 七郎	江藤 幹江
今竹 翠	

〈ご協力下さった方々〉
(順不同、敬称略)

藤 正彦 (株)日本パルス
平井 広子 風鈴堂、和紙はがき製作
岡田 清人 北山法律事務所、弁護士

シルバー インフォメーション ルーム 相談日
毎週 月、木曜日 10:00～16:00
電話 078-431-6008 (代)

神戸市主催 福祉フェア で
ハザー 出店



10月16日(日)
北区 しあわせの村

ボランティア団体が活動資金を集めるために出店します。ご家庭で眠っている不用品をお寄せ下さい。相談活動の通信費、事務費などに当てます。ご協力をお願いします。

連絡先 当ルーム(078)431-6008
または メンバーまで



編集後記

多くの方々にお力添えを頂き、在宅介護に関する無料情報提供も順調に二年目を迎えました。賛助会員としてご協力を申し出て下さった方々の外に、講演会のビデオ記録をかってでて下さった藤さん、法律に関する相談は気軽に、と申し出て下さった弁護士岡田さん、活動資金を作るための手漉き和紙の葉書を安く提供して下さった平井さん、少しづつネットワークが広がります。皆様のご投稿もお待ちしています。

賛助会員を募集しています

賛助会費：一口 1,000円(1年)

申し込み先:

シルバー インフォメーション ルーム
環(あくつ) 光子

(郵便振替)

01110-8-54173

ご協力をお願いします